

Title	表紙・編集後記ほか
Author(s)	
Citation	近世哲学研究 = Studies in modern philosophy (1999), 6
Issue Date	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/192344
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

近世哲学研究

第 6 号

-
- | | |
|---|-------------|
| デカルトにおける《真理》と《存在》
——明晰かつ判明に知得されるもの—— | —— 倉田 隆 1 |
| ヘーゲルの根拠論
——知と存在との相即—— | —— 山脇 雅夫 28 |
| 「第五省察」の隠された論理
——フッサール『デカルト的省察』における
「他者構成論」理解のための一視座—— | —— 次田 憲和 49 |
| シェリング哲学の出発点
——人間的理性の起源と歴史の構成—— | —— 浅沼 光樹 75 |
-

1999

Epistola XII

京大・西洋近世哲学史懇話会

編集後記

御承知の通り、このところが国の大学、とりわけ国立大学への風当たりはことのほか強く、大学の構造改革や独立行政法人化等々の意見や議論は日々まことにかまびすしい。しかもその議論の内実や目指す方向は、いっこうに定かには見えてこない。

明治の近代化以来一〇〇年、わが国の大学は、前半の五十年はほぼドイツのフンボルト大学方式を、そして戦後の五十年はアメリカ流大学をいわばモデルとしてきたと言えるであろうが、新世紀に向けての当節の改革にはそうしたモデルもなく、大学のイデオロギイ自体が見失われているように思われる。こうした全体的な混乱と、ことに永年の実学重視の傾向、さらには昨今の理科系中心の風潮のなかにあつて、文学部という学部や、ことに「哲学」という学問の伝統と名称すらもが、その存続を脅かされていると言つて過言ではない。それに対する反発ないし対応の論議はさておき、こうした時期にわれわれがなすべきことの一つは、地道に歴史と伝統に学びつつ、各自がいわば学問的基礎を固めることではないかと思われる。さしずめ本誌『近世哲学研究』が目指すべき道も、これに沿つたものであらう。

本号も、諸般の都合により刊行が年度末近くにならずに済み、御迷

惑をおかけすることになったが、先の趣旨に沿つた四篇の労作を掲載することができた。執筆者各位と、また応募論文の閲読に協力いただいた方々には厚く御礼を申し上げる。また今号で交代となつた先任の編集委員の一人にも永年の御尽力に心から謝意を表したい。

この「編集後記」も、ここら辺りで気分を一新して、次号よりは新しい記者にお願いすることになる。本誌のますますの発展と充実を心から祈念する次第である。

編集委員会	
代表	委員
菌田 坦	子野日俊夫
	福谷 茂
	武藤 整司
	浅沼 光樹
	折橋 康雄
	安藤 正人
協力	斉藤 了文

『近世哲学研究』バックナンバー

第1号（1994）

祝辞	酒井 修
ハイデッガーにおいて哲学を ——現存在の現象学的存在論考究——	田中 敦
カントと初期フィヒテとの接点	北岡 武司
義務論としてのカント倫理学 ——功利主義との対比——	蔵田 伸雄
仮象と反省 ——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために——	山脇 雅夫

第2号（1995）

カント哲学における「経験」概念について ——「世界」概念導入のための端緒として——	福谷 茂
ヘーゲルのコルボラツィオン論 ——市民社会の団体主義的変革に向けたヘーゲルの試み——	早瀬 明
工学はどういうタイプの学問か	齊藤 了文
信仰の情熱とその逆説 ——ケルケゴール『おそれとおののき』に おけるアブラハム解釈をめぐって——	田中 一馬
ハイデッガーのヘーゲル解釈 ——意識の二義性と意識の転換——	橋本 武志

第3号（1996）

『全知識学の基礎』の到達点	子野日 俊夫
読書人世界から学者共和国制度へ ——理性を制度化しようとしたカントの試み——	福田 喜一郎
デカルトにおける愛の区別について	武藤 整司

未済の人倫
——『精神の現象学』主-奴論の一解釈——
石田 あゆみ

ガダマーのディルタイ批判
——『真理と方法』を中心に——
折橋 康雄

第4号（1997）

一本の綱（Seil）としての人間
——ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題——
吉川 康夫

デカルトの懐疑について
——『省察』の「反論と答弁」を資料として——
安藤 正人

市民と国家の媒介
——「国民」形成の一側面——
小川 清次

『存在と時間』に於ける可能性概念の多義性について
橋本 武志

自然主義的存在論の隘路
——フッサールの「領域的存在論」における
超越論的構成の「自己關係的構造」——
次田 憲和

第5号（1998）

「常に誤る」と「時々誤る」
——デカルト的行論の一考察——
武藤 整司

ディルタイに於ける客観的精神の概念について
折橋 康雄

ハイデガーの他者論
安部 浩

執筆者紹介

倉田 隆	島根大学助教授
山脇 雅夫	高野山大学講師
次田 憲和	大阪芸術大学非常勤講師
浅沼 光樹	高野山大学非常勤講師

(執筆順)

近世哲学研究 第6号

1999年3月31日 発行

編集・発行 京大・西洋近世哲学史懇話会
編集代表 藺田 坦
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/>
TEL (075) 753-2444
振替 01080-3-31430

印刷所 協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL (075) 312-4010 (代)

定価 1200円 (本体 1143円)

STUDIES
in
MODERN PHILOSOPHY

No. 6

- Takashi KURATA : La vérité et l'existence chez Descartes 1
—— Sur ce qui est perçu clairement et distinctement ——
- Masao YAMAWAKI : Hegels Lehre von dem Grund 28
- Norikazu TSUGITA : Die verborgene Logik der fünften Meditation 49
—— Ein Gesichtspunkt zum Verständnis von Konstitutionstheorie
der Anderen in der *Cartesianischen Meditation* Husserls ——
- Kôki ASANUMA : Der Ausgangspunkt der Philosophie Schellings 75
—— Über die philosophischen Bedeutung
der Erstlingsschrift Schelling *De malorum origine* ——
-

1999

Epistola XII

Published by
The Society for The History of
Modern Philosophy
at Kyoto University